



## 国際緑化推進センターの植林活動 (1) 梅田の森

林 久 晴

### はじめに

財団法人国際緑化推進センター（以下、「JIFPRO」という。）は、平成3年設立後間もなく熱帯林造成基金を開設し、個人、企業、団体からのご寄付・助成金を財源として熱帯地域で植林協力活動を展開してきた。その概要は本誌のNo.78で紹介したが、活動開始後19年が経過し、平成23年3月末現在の植林実績は、5カ国でプロジェクト数が45、植林面積は6,312haとなっている（図1）。プロジェクトの内容は様々であり、植林を通じて今後の植林協力の参考となると思われる知見も数多く得られたところである。

本欄をお借りしてその概要を紹介し記録にとどめておくこととしたい。なお、ここで紹介する内容は特に毎年継続的に特別なテーマを設けて調査したものではなく、プロジェクト形成に至った背景や、通常の事業管理を通じて得られた技術成果や現地で収集した情報、見聞を含めたものであることとお許しいただきたい。

### 梅田の森

初回は梅田登氏に敬意を表して「梅田の森」について紹介する。「梅田の森」と称される海外植林協力は、熱帯林の保全造成や地域住民の生活向上などを願って、永年にわり莫大な私財を投じてこられた大阪在住の梅田登氏の協力による植林である。

本欄は皆様の活動記録を掲載する予定ですので投稿をお待ちしております。詳細29頁を参照下さい。

氏は大正7年生まれ、戦後シベリア抑留から復員し、大変なご苦勞の中で事業に成功を収めるとともに熱帯林問題に深い関心を持たれ、平成に入ってから様々なチャンネルを通じてタイ、フィリピン、ベトナム、マレーシア、ミャンマーの5カ国で植林協力をされた。JIFPROの熱帯林造成基金事業としては、マレーシア、ベトナム、ミャンマーの3カ国で植林協力をされた。現在93歳になられたが、88歳になるまで毎年植林地に足を運び自ら林の生育状況を確認められるなど情熱を注ぎ、タイ国から勲章を授与されたのをはじめ関係国から尊敬を集められ、平成16年には林政記者クラブの「第45回グリーン賞」の栄に浴されている（写真1）。

JIFPROの「梅田の森は」、表1の通り平成4年から平成16年の13年間に亘って7プロジェクト、1,173haの植林がなされた。以下順を追って各梅田の森のプロジェクトの概要を紹介することとしたい。

#### (1) マレーシア

マレーシアでの3プロジェクト750haの植林はサバ州で、SAFODA (Saba Forestry Development Authority) をカウンターパートとして実施した。SAFODAは、サバ州の伐採跡地の再植林を担う州の公的機関であり、植林活動はこのSAFODAの管理する伐採跡地を対象地としたことから、植林は水源涵養、国土保全、良質な木材生産を目的とするものとなった。

第1「梅田の森」はサバ州の北部に位置するクダット地区で平成4年から平成7年に300haの植林を行った。植林方法は3カ月苗畑で養苗されたア

Hisaharu Hayashi : JIFPRO's Forestation Activities (1) Umeda's Forests  
(財)国際緑化推進センター

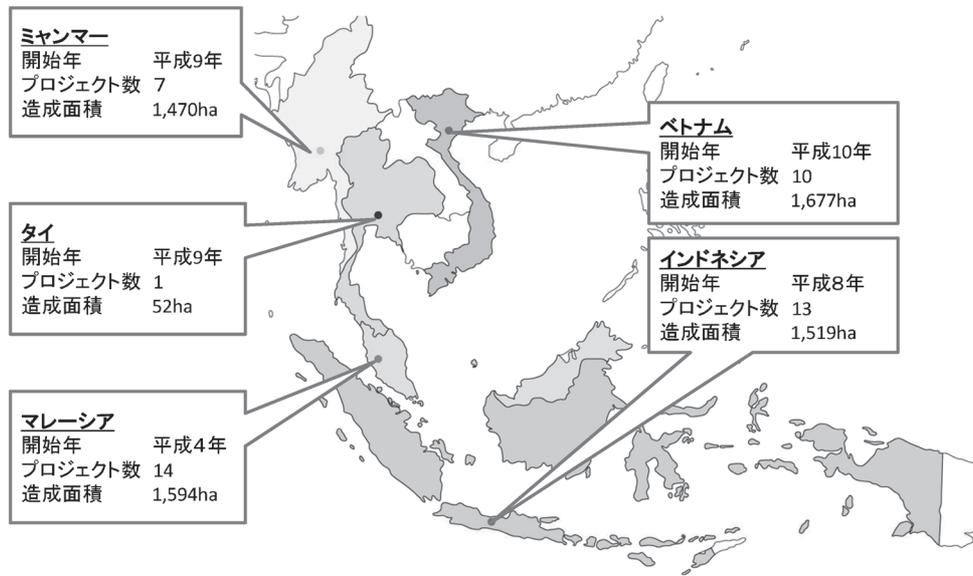


図 1 平成 4～22 年度 熱帯林造成事業 実績 6,312ha



写真 1 第1梅田の森（クダット平成4年植栽）の林内を調査する梅田登氏（平成17年撮影）

カシアマンギユウムの苗木を使用し、2×3m 間隔で植栽した。この植栽間隔は後述の第2、第3「梅田の森」及びベトナムのアカシアマンギユウムの植林も同様である。対象地は、伐採・焼畑跡地の荒廃地での植林であったが、順調に生育し平成17年（植栽後おおむね12年）に伐採・収穫された。収穫量についての正確なデータは入手していないが、収穫材を見る限りにおいては芯腐れなども少ない良質材

で、小径木は地元でチップにされたが、国外にも輸出された（写真2）。

第2「梅田の森」は、平成7年から平成9年にコタ・ベルト近郊の荒廃丘陵地で150ha造成した。この植林地は平成10年に異常乾燥の中で山火事により焼失したが、平成11年現地側の自助努力により復旧した。その後平成16年の現地調査では順調に生育しているのが確認された。

第3「梅田の森」は、サバ州の最北端部にあるベンコッカ地区で平成9年から3年間で300ha植林する計画でスタートした。しかし、毎年植林時期に大雨によるアクセス道路の損壊が生じたために、植林予定地を一部変更するなどし、大幅に協力期間を延長して最終的に平成16年の完了となった。

このサバ州での協力は、プロジェクト周辺地で行われる焼畑耕作等に起因する山火事防止のための技術的な対策や、住民の理解と協力の獲得が重要であった。特に平成9～10年に発生したエルニーニョによる長期異常乾燥の中では、多くの植林地が火災により焼失し、第2梅田の森も被害を蒙ったが、上述の通り関係者の理解と協力を得て、ほぼ計画通りの植林面積を確保することができた。

表 1 梅田の森一覧表

プロジェクト名	植林目的 住民生活向上と安定の他	活動期間 平成	場所	面積 (ha)	植林樹種
マレーシア・サバ州					
第1「梅田の森」	荒廃地緑化・木材生産	4～7年	クダット	300	AM
第2「梅田の森」	水源林造成	7～9年	コタベル	150	AM
第3「梅田の森」	荒廃地緑化	9～14年	ベンコッカ	300	AM
ベトナム「梅田の森」					
第1「梅田の森」	水源林及び果樹園	10～13年	ハノイ市	200	AM, CP, FT
第2「梅田の森」	大学演習林	13～14年	ハータイ省	70	AM, AH
第3「梅田の森」	地域環境改善	15～18年	ホアビン省	53	AM, AH, YU
ミャンマー「梅田の森」					
水源涵養林		16～18年	ニャンウー	100	NS, YK
合計 7プロジェクト		4～18年	7カ所	1,173	

注) 樹種略名: AM (アカシアマンギウム), AH (同左ハイブリッド), YK (ユーカリプタスカマルドレンシス), YU (同左ウィロフィラ), CP (カリビアマツ), FT (果樹, 本文参照), NS (在来種, 本文参照)



写真 2 第1梅田の森から伐採・搬出され船積みのため集積されたアカシアマンギウム (平成 17年撮影)

また、植林樹種のアカシアマンギウムは、サバ州では年間 30～40m<sup>3</sup>の成長量が期待されているように成長が早く、かつ適応する土壌範囲が広いことでも知られている。天然分布はオーストラリアクイーンズランド北部、ニューギニア、モルッカ諸島で南半球の樹木だが、マレーシアでは早い時期から早成造林樹種として導入して好成績を収めている。今日ではベトナムやインドネシアでも一般的に植栽されている。

アカシアマンギウムの用途は、チップ・パルプ原料、家具、建設用材、トラックの荷台床材等として幅広く、サバにはアカシアマンギウム専門工場もあるほどで、家具、トラック荷台床材等を製造する比較的規模が大きい工場もみられる。

#### (2) ベトナム

ベトナムにおける「梅田の森」は、3プロジェクト 323ha である。ベトナムで最初の「梅田の森」は、ハノイ市郊外で水源涵養と住民定住化の目的で、180ha のアカシアマンギウムとカリビアマツを植栽した。カリビアマツは、植栽後 3、4 年の間の成長は目立たなかったが、数年後からの成長は目を見張るものがあり、今では直径約 15cm にまでに育っている (写真 3)。また、住民の要望に応じてパレンシイ、ライチなどの果樹園 20ha を造成した。

第2「梅田の森」は、ベトナム林業大学の演習林で持続的木材生産モデル林の造成を目的に平成 13 年にアカシアマンギウムとアカシアハイブリッドが 70ha 植林された。大学の良好な管理によりモデル林として整備されつつあったが、平成 21 年に土地利用計画の変更により一部伐採された。

第3「梅田の森」は、平成 15 年に地域環境改善と住民の生活向上を目的に 53ha 造成した。植栽樹



写真3 ベトナム梅田の森のカリビアマツ11年生（平成21年撮影）



写真4 ミャンマー梅田の森、通称サデ水源の森5年生時（平成21年8月撮影）

種はアカシアマングユウムとユーカリプタスウィロフィラで、いずれも極めて早い成長を示した。諸事情からわずか4年余で収穫され材は地元の中密度ボードの製造会社に販売された。収穫量は約80m<sup>3</sup>/haあったとのことで、収穫後は、住民が得た売り上げ収入の一部でアカシアマングユウムを再植林した。また、ユーカリプタスウィロフィラは萌芽更新（3回まで可能な由）が行われている。

ベトナムの「梅田の森」の概況は以上のとおりであるが、いずれの植林地も成長がよく、特に山火事被害や病害虫による被害もなく成果を収めている。また、ここでの植林は住民の所得向上、民生安定に大きな役割を果たした。

### (3) ミャンマー

平成16年から平成18年にかけてマンダレー管区ニャンウー地区サデ村において、地域住民の生活用水池の水源涵養を目的に、100haの森林を造成した。植林樹種は、アルビジアレベック、カシアシアメア、アカシアカテチュ、テクトーナハルミトニア、など地元の在来樹種とユーカリプタスカマドレンシスである（写真4）。このニャンウー地区は年間降雨量が600mm程度の半乾燥地で乾季の乾燥が激しく、土壌は貧栄養であることから、乾期における乾燥対策が最重要課題である。このための植林技術とその創意工夫については稿を改めて紹介したいと考えて



写真5 梅田登氏寄贈の給水タンク車（平成17年撮影）

いるが、梅田氏はこのプロジェクトの開始に当たり、乾燥対策として給水車1台を寄贈した（写真5）。これによって、「梅田の森」のみならずニャンウー地区のJIFPROプロジェクトの乾季の灌水が飛躍的に促進され、植林木の活着率、成長が大きく改善された。なお、このような灌水努力の甲斐もあってサデ水源の森は、生育速度は遅いものの着実に成長しており、住民は乾季に貯水池の水の量が増えたといい、この貯水池を「梅田の池」と呼ぶようになったという。